

総務文教委員会記録

令和5年8月18日（金）
9時33分～12時41分
全員協議会室

【委員】 永見委員長、三浦副委員長、
肥後委員、大谷委員、芦谷委員、佐々木委員、西田委員

【議長・委員外議員】

【事務局】 松井書記

【議題】

- 1 【取組課題】 不登校児童生徒への支援について（委員間で協議）
- 2 その他

【別紙会議録のとおり】

【会議録】

[9 時 33 分 開議]

○永見委員長

ただいまから総務文教委員会を開会する。出席委員は7名で定足数に達している。レジュメに沿って進める。

1 【取組課題】不登校児童生徒への支援について（委員間で協議）

○永見委員長

本日はまず、各委員から、山びこ学級の評価と、そのほかに考えられる新たな支援方法について意見を発表してもらいたい。その後、取組課題のゴールをどこに設定するかを協議し、そのゴールの達成に向けて今後どのように進めていくかを確認したい。

○大谷委員

不登校児童は、学校で担任をしていたときに対応したことがある。基本的には、担任が出向いて対応するが、しょっちゅう来てもらっても困るというスタンスの子もいるので、定期的に会いに行くことを約束し、登校を促したり何らかの支援をしたり、今回話題になっている施設等へもつなげていくことがある。したがって、基本的には在籍している学校がそれなりの対応を取っているものと思っている。その中で、改善に向けてどう取り組むかという点では、浜田市の場合は、そこそこの長い歴史の中で、早い時期から対応できていると感じている。とはいえ、家庭内にとどまっている子どもたちをいかに外の環境に導いて、社会生活に適応できるような、あるいは自己肯定感が高まるような方向に持っていくための施策をどう講じるか、これまで浜田市でできていなかった分野について、どのように取り組むかを考えていけば良いと受け止めている。

施設の立地や状況については、確かに専用の施設が整えばそれに越したことはないが、範囲の広い浜田市全域を捉えたときには、交通の便が良い場所への立地を考えざるを得ない点があるので、現状で十分とは言えないまでも、基本的な条件は整っていると感じている。軽運動などの施設が建物内にはないが、近くの所を使うなど、それなりに工夫しているので、現状で良いとは思わないが、限られた条件の中で対応できているという点では、より手を差し伸べていかなければいけない、家庭内にとどまっている児童生徒を誘えるような手立てを講じていくことが当面の課題だと感じている。

○芦谷委員

この不登校の問題の入り口の段階で、私は通級指導教室や特別支援学校、いろいろな相談機関等へのヒアリングも提案したが、いきなり京都と奈良へ視察に行ったので、山びこ学級や青少年サポートセンターと、京都と奈良の例を対比しての思考なのでなかなか論点が深まらないが、とりあえず意見を書いてみた。

山びこ学級について、立地は、行政機関への併設で本当に良いのか、市内1か所で本当に良いのか、疑問に思った。中心部なのでアクセスは良いが、本当にそれで周辺

部の子どもが通学できるのか。施設は、ほかの行政機関への間借りなので、立派とは言えないと思った。活動内容は、先生方がたくさんおられて進められているが、児童生徒が状況に応じて成長できるような活動を模索しておられると思い、期待している。人員配置は、千差万別の子どもの成長にかなうように、微に入り細に入る教育内容があつて良いと思っており、現場の声も聞きながらさらに人員を拡充する必要があると思った。地域との関わりは、地域社会と隔離される傾向にあると思うが、多様な地域資源、人材が関わる必要があると思った。官民連携はもちろんだが、浜田高校には通信制と、定時制には昼間部と夜間部があるらしい。やはり学びの場は単一的な開所時間よりも、高校生も見据えた昼間、夜間、通信制もあつて良いと思った。

その他として、不登校だけではなく多様な要素があるが、これ以外に特別な支援や配慮を要する子どもたちの養育や教育も含め、子ども全体として捉え、対応する必要があると思った。2点目は、青少年を地域社会に参画させる、有用な人材なので成長を促し、地域社会へ復帰してもらおうということで、山びこ学級や青少年サポートセンター、その他の施設や機関間での連携支援体制の網の目ができていて、その網の目から児童生徒が抜け落ちないようにといったことも必要だと思った。

新たな支援方法も、立地についてはサテライト的なものがあつても良いと思った。施設では、行政機関の間借りでは運動施設、運動場がないのが課題だと思った。活動内容は、学校への復帰や社会的自立を見据えた内容が求められる。人員配置は、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーについては2名と8名で10名である。時間も1,600時間と言われていて、現場の先生の声では、週1、2日では不十分だと聞いている。正規職員を引退された方々が対応されているが、専門職を雇用して、現場なり子どもたちを指導したり相談に乗るような体制が必要だと思った。

○肥後委員

山びこ学級について、立地は良いと思う。アクセスも、自転車、徒歩、バス、自動車では多少歩いたりするが、便利な所にあると思う。確かに自然体験の活動や屋外に行く際に、あの場所で良いかという疑問はあるが、現時点で不登校児童生徒がそこに通えるということは尊重したい。施設に関しては明らかに部屋数が不足している。もともとそのように造られた建物ではないのは分かるが、プライバシーのことを考えると、RC造だと間仕切りはつくれても声が漏れるので、部屋数を増やすといっても現実的ではないと思った。実際に5月に現地視察した際に、職員から部屋数が不足していると言われた。活動内容については、いろいろなカリキュラムを組んで、実際に授業内容を見ていても、寄り添ったサポートができていたと思った。ただ、子どもの人数が少なかったのも、あれがもっと大人数になったときに、しっかりと寄り添えるかは疑問だった。屋外活動や体験活動はしっかりとやっておられると受け止めた。人員配置については、児童生徒一人一人に向き合おうとすると不足しているように見受けられる。通常の学校であれば1学年30人とした場合に教師は1人しかいないが、ここの場合は不登校児童生徒なので、より真摯なサポート、相談事を受けるのに先生が足りずに相談に乗れないというのは避けたい。地域との関わりについては、実際にやっているよう

なので、とても良いことだと思う。社会体験活動や見学、自然活動、創作活動といったことを地域の人と一緒に、疑問点を見たり聞いたり、教えてもらったりする中で、コミュニケーションが取れるのは良いと思う。本音を言えば、もっといろいろなことが限られた時間の中でできればというのもある。官民連携は、最初の立地、アクセスにも絡むが、浜田地域で言えば良い立地だが、他の地域からここに来るためのバス路線がないといったように、いわゆる公共交通の網から漏れてしまっている子どもが不登校の当事者になった場合に、親が送迎できれば良いがそれが難しい場合、官民連携の手法として民間事業者で送迎するのも一つあるかもしれない。また、先ほど芦谷委員が言われたが、教員免許を持っている方や退職された方で、こういった所で働きたい、サポートしたいという方がおられたら、ぜひ積極的に雇用して、数時間でも良いので関わってもらえるのも、官民連携の一つではないかと思う。また、その他だが、官民連携の支援の方法をもっと深めていく、できることをやっていくのも一つの手だと思う。

○佐々木委員

まず山びこ学級について、交通の便は良いが、もう少し目立たない立地が必要と感じている。バス停の近くでアクセスしやすいが、周辺地域から通級しにくいのが課題だと思う。広さ、設備等については、1部屋しかないのが非常に少ないのが大きな問題だと思う。活動内容については、学ぶという教育支援センターとしての位置付けからだと、十分とは言えないまでも、ある程度適切な活動内容と思う。人員配置は、聞き取りによると、先生の配置に苦労しておられるということで、もう少し何かしらの方法で配置策がないものか。地域との関わりについては、教育支援センターという位置付けなので、あまり必要でない気もするが、可能であれば何かしらの関わりが持てれば良いと思う。官民連携は検討には値すると思う。

新たな支援方法としては、立地について、あまり目立たず通いやすい場所が適当だと思う。アクセスについては、交通の利便性が良いこと、誰もが通級しやすい手段を構築すべきと思う。施設については、教室や相談室など、複数利用ができる施設が必要である。活動内容は、他の事例などを見ると、不登校のレベルに応じて活動は様々であるべきと思う。レベルによって何段階か利用できるような居場所機能が設置できれば良いと思う。各学校で自分のペースで過ごせる校内フリースクールが今のところ適当ではないかと思う。人員配置は、教員と専門の支援員や相談員がとても重要だと思うので、状況に応じて設置できれば良い。地域との関わりは、居場所としての位置付けだとより重要になってくると思う。官民連携は、ふさわしい民間団体や個人などがあれば関わってほしいが、居場所ということだと、むしろ民間の力を借りたほうが取り組みやすい場合もある。

○西田委員

山びこ学級を視察したが、立地的に関しては、最初からすごく違和感があった。本当に心が豊かに育つのか、柔軟な環境としては空気感が違うと感じた。アクセスは、ベストとは言い難いが、一定に確保されている。施設はもっと部屋数が必要だし、運

動できる環境も必要だと思う。活動内容は、限られた教員で精一杯やっていると思った。人員配置は、増員するには予算が必要だと思うが、もっと確保しないといけない気がした。地域との関わりは、教員以外の相談員でも、子どもと同じ目線になれる人が浜田市内におられると思うので、人材の掘り起こしも必要だと感じた。

山びこ学級に通っていない不登校児童生徒が一番問題だと思う。通うことすらできない児童生徒が増えている現状だとすれば、そこはどうかしないといけない。それから、今の立地ではいけないと思う。もっと開放的な、伸び伸びと体を動かせる立地、環境、例えば廃校をリノベーションしたような施設ができれば良いと思う。その場合にはできるだけアクセスが良くなるよう、行政の積極的な関わりが必要だと感じた。

○三浦副委員長

山びこ学級は、そもそも適応指導教室から教育支援センターになって今に至る経緯があり、学習指導して学校へ復帰するのが一つのゴールだと思うが、居場所をつくることを考えるときに、学校への復帰が必ずしもゴールではないと考えると、学校以外の学習支援の場はもちろん必要だが、それ以外にも選択肢は必要だと感じる。その前提を皆と意見交換したい。

山びこ学級の立地やアクセスは、皆の意見と重複する部分がかかなりある。中心市街地にありアクセスは悪くないが、市域が広いので旧那賀郡エリアに住む利用希望者にとって通う負担はどうしてもある。ニーズがどれほどあるのか、フォローをどうするか考えなくてはいけない。これまでに設置されていた場所と、独立性や自然環境などを比較すると、動線が確保されているとはいえ、人の出入りが周辺に多く、建物も老朽化していて、明るく居心地の良い雰囲気ではないように思う。一つ一つ比べていくと施設としてどうなのか、より良くすることはできるだろうと感じた。ただ、教育委員会や青少年サポートセンターと隣接しており、様々な形で連携しやすく、利便性が高まっているという職員の声はきちんと評価すべきだと思った。人員配置について。教職員の経験者が多かったので、学校と同じような雰囲気が生まれやすいのではないかと思った。先生方の対応が適切でないということではなく、学校と同様の雰囲気になることに対する、子どもたちの反応はどうなのだろうかと思った。先生というスキル以外の、様々なサポートがいろいろな角度から必要なのであれば、経験やスキルを持っている職員の配置についても、適正なメンバー配置とはどういうものなのかを考える必要がある。

居場所について、関係書籍を読んだりすると、自分のことを全て受け入れてくれる場所と解釈されているケースが多く、私もそのように捉えている。青少年サポートセンターはあまり決まりが設けられた場所ではなく、自分のやりたいことを自由に実践できる場所として設置されているが、そもそも青少年サポートセンターをフリースクールと呼んで良いのか、利用年齢がおおむね40歳までとされているが、そこも少し整理してはどうかと思った。

佐々木委員が言われたが、校内フリースクールといった新たな居場所を設けるなど、

新しい第三の居場所のようなものは検討する必要があると思っていて、浜田市内に民間のフリースクール等を提供しているところがなければ、外部のNPO法人などと協力して公的に民間と連携して設置する方法も考えられる。第三の居場所をつくっていく必要があると思っている。

保健室登校など、完全な不登校ではないが、学校に通いづらい傾向にある児童生徒への対応がどうなっているのかも気になった。学校教育への復帰に関するモチベーションはどうか、執行部はどの程度実態を把握しているのかも気になった。

○永見委員長

山びこ学級の立地については、市の中心部の子どもは通級しやすいと思う。また、行政機関との連携も取りやすいと感じた。アクセスは、中心部の児童生徒にとっては公共交通の利便性も比較的良く通級しやすいが、周辺部の子どもにとっては利便性が悪い。施設について、現在の規模は手狭ではないかと思うので、検討する必要があると思う。活動内容については、授業時間や学級行事の内容は良いが、社会見学や体験学習、友達との交流機会は見えづらいので、どうなのだろうかと思った。不登校児童生徒の保護者の声を聞いたところ、送迎が必要な子どももあり、毎日送迎するのは難しいが、そのあたりの調整ができれば通えと聞いているので、検討する必要があると思う。120人を超える不登校児童生徒がいるので、各地域での居場所づくりも検討する必要があると思っている。活動内容については、視察先でも話を聞いたが、オンライン環境、タブレット端末等を活用して学校とつながれば、友達づくりなどにも役立つのではないかと思う。また、児童生徒が自ら進路を考えて自立することを支援するためには、いろいろな職業を持った人と会って話を聞いたり学んだりできる機会も検討したらどうかと思った。地域との関わりだが、学級以外での活動としてはやはり体験学習が、地域との関わりに役立つのではないかと思うので、そういう活動も取り入れたらどうか。

市内には26か所のまちづくりセンターがあるので、居場所づくりに利用し、官民連携で取り組める支援を検討したらどうかと思った。

皆から意見を伺った。これらをどのように取りまとめて進めれば良いか協議したい。また、ほかの委員の意見を聞いた感想などがあれば発表してほしい。

○芦谷委員

山びこ学級をフリースクールに置き換えるとすると、場所、機能、通学支援も含めて考えるべきだと思う。青少年サポートセンターがフリースクールとすれば、それも併せて、遠隔地から通うことも、京都市や上牧町の例を良しとして、それに近づくように、今の浜田のままで良いのかと感じた。

ある関係者の話だが、不登校児童生徒がずっと増えているが、この問題は解決しないとっておられた。総務文教委員会として、不登校児童生徒が増えていることへの危機感を共有しながら、具体的にハード面の施設を造ることは一つとして、その子たちを救うセーフティネットを何か考えないといけない。もし執行部に提言するならハード面の通学支援と、相談支援体制があるというのが所感である。

○三浦副委員長

今設置されている教育支援センターとしての山びこ学級の機能についての話と、山びこ学級だけでない別の居場所を設置する必要性と、二つあると思う。山びこ学級に対する強化策や改善策は、皆から出ていた意見をまとめていくのが一つと、加えて、校内フリースクールのような新たな機能の設置や、場合によっては民間事業者と相談しながら新しい場所を開発していくとか、青少年サポートセンターの機能充実を含めて、こういう居場所を求めていこうという議論と、大きく二つあると思うので、そういったところを意見交換できたら良い。

山びこ学級に遠くから通う人へのサポートが必要ではないかということは複数の委員が言われたので、そこに対する補助や何かしらの支援、あるいはサテライト化などもそういった議論だと思う。また、体制についても複数の委員が言われていた。今の体制やサポートのあり方が適正なのかは議論の余地があるだろう。部屋数が少ないというのはハード面の課題だと思う。これは直接現場から聞いた声であり、皆の共通認識だと思う。どのような部屋を設けたほうが良いのかといった設備の充実が三つ目だと思う。

あと、これは個人的な意見だが、不登校児童生徒の予備軍にも意識を向けるべきだと思うので、そういったところへの実態調査などをするべきではないかと思っている。そういう対応が含まれると良い。

○永見委員長

ほかに協議が必要だと思う点はあるか。

○大谷委員

学年が上がるに従って不登校児童生徒は増える。だから、どういう状態かをこちらでも認識しておかなければいけない。居場所づくりも必要だが、つくったからそこに行くかというところもそういうわけでもなく、そこに居る人への信頼感が醸成されたり、そこでのプログラムに刺激を受けて心を開いていくのだろう。施設も前提としては必要だが、そこに居る人もまた重要である。背景として、その辺の論議もしておく必要があると思う。

不登校児童生徒の支援は、今ある施設で既にいくらかはできているので、その充実とそれ以外の新たなことが必要になるが、どこを目指すかをしっかり見ておかないと、それぞれが意見を言ってそれでおしまいになってはいけないので、着地点として、どういう児童生徒をどうしたいのかを整理したほうが良いのではないかと感じている。

○永見委員長

信頼づくりが子どもたちの心を和らげるためには必要だと思うので、信頼できる大人との関わりといったことも、ここでの協議で進めていけたらと私も感じた。ほかに何かあるか。

○三浦副委員長

佐々木委員に伺ってみたいのだが、こういう問題を委員会で取り上げることになったきっかけは、佐々木委員が一般質問で取り上げられたこともあったと思う。今大谷

委員が言われたように、どういう姿があるべきかというところで、こうなれば良いというビジョンのようなものを再度聞かせてほしい。参考になると思う。

○佐々木委員

肥後委員と視察に行つて勉強してきた経緯を含めて話すと、フリースクールは校内でなくても良いが、校内につくるメリットは、担当の教員が配置されることが大きい。教員なのでほかの先生との関わりが持ちやすいので、不登校児童生徒が新たに出ないような情報共有がしやすいし、フリースクールはゲームなどのやりたいことをして過ごす、勉強したいと思った子どもがいたら先生の配置をやりくりしながら教えられるというメリットがある。

大谷委員が言われたように、人やプログラムに刺激を受けることはフリースクールに通う上で重要なことだと思う。校内フリースクールにも支援員が配置されているが、支援員は単なるお助けではなく、担任教師よりも子どもと一番長く接するため、子どもは支援員に大きく影響を受けていろいろな可能性を開いていく。専門の支援員ではなく、一般の方でも子どもたちと関わることで非常に良い影響を与えられる。校内フリースクールの担当教員と支援員とで非常に良い効果が出ていると思った。

山びこ学級は教育支援センターで、勉強を教える意味合いが強い場なので、学校に行けないが学ぶ意欲のある子が来るが、ここに来る子は不登校児童生徒の10分の1くらいなので、あとの100名を超える子たちといかに関わりを持ちながら、教育の場に戻すことができなくても、いつかやりたいことができたときにやれるような関わりをつくっていけるかが重要だと思う。これにはいろいろな段階があつて、話すだけの子どもいればゲームを持ってくる子、趣味を支援員とやる子もいる。上牧町の教育長も、フリースクールの活動には答えがないと言われていたので、いくつか種類があればその中から子どもが選べると思う。そこには民間との連携もあるべきと思う。学校に行けない子どもたちをいかに大人とつなげるかが、山びこ学級に行けない子どもたちにとって重要だと思う。

○三浦副委員長

佐々木委員の考え方に共感している。強く思うのは、学校に復帰することが必ずしもゴールではないので、学校に行けない子どもがどこに通うのか、どこにいるのかといったときに、必ずしも山びこ学級だけが答えではない。そうではないところに行政支援が必要ならば、それ以外の場所を設けるという選択肢を行政は考えるべきだし、校内に設けるメリット、校外に設けるメリットを踏まえて、どういう形が良いのか具体的に検討していく段階に進めば良いと思う。繰り返しになるが、学校に復帰することがゴールではない。選択肢を地域が持っていることが必要だと思う。それが居場所なのかフリースクールなのか、自分が自由に活動を考えながら過ごせる場所は設けていくべきではないかという観点から、山びこ学級も求められる場所だと思うので、その機能充実と、加えて新しい居場所をつくるべきだと思う。

○大谷委員

学校がゴールではないというのは、そう思う。ただ、別のルートをたどったときに

おいても、学ぶ環境は提供できるようにしておかなければいけない。その子が学びたいと思ったときに学ぶ材料が提供できるようにしておかないと、自分の役割を認識して社会に関わり、そこでやりがいを見つける方向性の人生が多分良いのだろうと思う。それならば、そういうことが経験できるような場を提供するべきだろう。今は校内フリースクールだが、学校という場が息苦しくて行けないという子も出てきていると思う。ギフテッドという非常に能力が高い子どもが、学校で学ぶことが面白くないという特異な存在に見られ、いじめられて不登校になる例もあるらしい。

多様な社会を構築するという大きな視点がある中で、学校も多様であるべきと思うが、多様性を確保するだけの人員配置は現在の教員定数法ではなされていないので、こぼれていく生徒が出るというのが現状だと思う。そこへ行政が何らかの手立てをするのは意味があるが、そういうルートにおいてもその子がより良い人生を送るための学習の場を提供するような施策でないといけない。

○三浦副委員長

大谷委員が言われた意見は私も同感である。今の、学校以外の場所でも学びがきちんと確保されるという意味で居場所の必要性、それがフリースクールなのだとは私は理解している。そういったものの選択がよりできればなお良いと思う。いずれの道をたどろうとも、学びや社会との接続を提供できる場所は必要だと思うし、いろいろなケースが出てくる中で、現在の学校のあり方や存在を相対化して、それだけが解なのかを問うて、その問い掛けによって新しいものをつくるかどうかは結果論なので、必ずしもそれを目指す前提ではないが、相対化したスタンスで現状を捉えながら、新しい機能が必要なら浜田市として考えていくべきだと思う。

○芦谷委員

もう一つの視点として、どのような子であっても、市民であり、社会を構成する一員なので、そういった人たちに光を当てる、活躍の場をつくる、そういう視点だと思う。だから、単にフリースクールへ行ったということは越えて、一市民、一社会人として浜田市のために頑張ってもらうことを期待したい。

○西田委員

どのような子であっても、将来的に生きる力、前向きになる心を身につけることが必要である。山びこ学級に通っているのは中間的な子どもたちであり、一番問題なのは行っていない子たちがどういう状況なのか。前向きになる気持ちが空っぽの子の心を埋める手立てはやはり人との関わりが重要である。何気ない人たちとの何気ないコミュニケーションが子どもたちの心を満たしていく気がする。コミュニケーションや体験から少しずつ広がって、いずれ心が満ちると思うので、取り残してはいけない。

個人的な意見だが、自然も大事である。自然の力、目に見えない力が生きる力を教えてくれる。そういったものも含めて、いろいろな環境がある。

○永見委員長

開会して1時間が経過したので暫時休憩とする。

[10時 41分 休憩]

[12時 33分 再開]

○永見委員長

委員会を再開する。皆からいろいろ意見を伺ったが、既存の施設の機能等の充実も含めて正副委員長で提言の文案をつくろうと思う。それをもとに次回また意見を伺うというように進めて良いか。

(「異議なし」という声あり)

ではそのようにする。次回の委員会の日程だが、9月12日に総務文教委員会があるので、その後に皆の意見を聞きたいと思うが良いか。

(「異議なし」という声あり)

ではそのようにする。

2 その他

○永見委員長

委員からほかに何かあるか。

○芦谷委員

委員会代表質問はしないのか。

○永見委員長

今のところは提言という形で先ほどから話が出ているので、そのあたりでこの不登校児童生徒への支援についてはまとめたかと考えている。

○芦谷委員

不登校のことに限らず、今度の9月定例会議で、総務文教委員会の委員会代表質問はしないのかということである。

○永見委員長

今のところそのような協議はしていないが、委員会代表質問をすべき項目等があれば意見を出してもらい、皆の同意が得られれば委員会として質問したい。

○芦谷委員

今まで総務文教委員会では委員会代表質問をしていない。正式にこの委員会の中で議論して方向性を出すべきだという疑問があったので質問した。

○永見委員長

了解した。委員から代表質問に該当する項目があれば伺って、皆に諮って次のステップへ進みたい。意見があれば聞かせてほしい。

○芦谷委員

個人的には、そういった案を持ち合わせていない。

○永見委員長

ほかの委員はどうか。

○三浦副委員長

今こういう取組課題を持って活動しながら、最後に委員会の総意としてまとまった段階で、例えばそれを委員会代表質問の場でも執行部に投げ掛けるなど、適切なタイミングが来れば委員会代表質問も行うべきと思うが、今はまだまとめの最中なので、今の段階では委員会代表質問をするテーマは特段ないと思う。

○永見委員長

ほかに何か意見があるか。

○大谷委員

委員会代表質問という場があるので、現時点で9月定例会議にやろうという段階ではないと思うが、せっかくの機会なので今後の委員会代表質問を想定しながら、できるだけ執行部側の考えをただすという方向性は常に持っておきたい。今回は時間的に厳しいと思うので、9月定例会議にはやらないという決定は仕方ないと思う。

○永見委員長

ほかに意見はあるか。

(「なし」という声あり)

では9月定例会議には委員会代表質問は行わないという形で進めてもよろしいか。

(「異議なし」という声あり)

ではそのようにする。ほかに何かないか。

(「なし」という声あり)

ないようなので、以上で本日の総務文教委員会を終了する。

[12 時 41 分 閉議]

浜田市議会委員会条例第65条の規定により、ここに委員会記録を作成する。

総務文教委員会委員長 永見利久